

(CT) の効果を観察した。NaF 10 mM により cAMP 量は経時的に著明な増加をみた。TSH 軽度な増加をみた。保生時間 10 分とした場合、NaF は 30 mM まで cAMP 量を dose dependent に増加させた。

犬甲状腺 slice を諸種物質と保生後 cAMP 産生をみると、NaF で cAMP 産生増加は認められなかった。一方 TSH や CT は dose dependent に、その産生増加を認めた。しかし、この slice 保生時に ATP 5~10 mM を添加すると、NaF の cAMP 産生効果は著明に認められた。

犬甲状腺 homogenate を用いて Mg⁺⁺ dependent ATPase および AMPase に及ぼす諸種物質の影響を観察した。対照に比し、NaF 10 mM は約 50% の抑制効果を認めた。NaN₃, ouabain も軽度な ATPase 抑制効果を認めた。

以上の実験より、TSH は甲状腺 AC 刺激作用により cAMP 産生を惹起するが、NaF の cAMP 産生効果は基質 ATP を添加してはじめて認められるので、Rodbell らのような AC の Catalytic unit の刺激よりも、ATPase および AMPase の抑制により cAMP が増加すると推測された。

35. 抗 DNA 抗体ラジオアッセイの臨床的意義

森本 義人 大城 徳成

水田 亘

(神戸市立中央市民病院・臨床病理)

山本 和高

(同・内、島根医大・内)

森 徹 上野 謙蔵

高山 英世

(同・内)

¹²⁵I 標識 DNA と血中抗体の結合物を硫酸で沈澱させるイムノラジオメトリック法による抗 DNA キット(科研)について基礎的ならびに臨床的検討を行ない本法の有用性を認めた。

基礎的検討の結果、抗凝固剤添加血漿では血清よりも低値の成績が得られた。血清保存による力

価の低下は、-20°C ではみられず、4°C では 2 週間後低下を示した。イントラアッセイの CV 値は 14.0~23.2% であった。高力価血清の希釈系列は標準曲線とほぼ平行した。

健康正常人 25 例は、いずれも 10 u/ml 以下であった。SLE 25 例, DLE, RA 9 例, PSS, DM, ITP など 17 例, 橋本病およびバセドウ病 16 例, その他の各種疾患患者 34 例, 計 101 例。そのうち 25 u/ml 以上を示したものは 21 例で、SLE では活動性の 13 例すべて高値。SLE 以外で高値を示したものは、PSS 2 例, バセドウ病, RA および DM 各 1 例, その他 3 例であった。10~20 u/ml の境界値は 18 例とみられた。同一血清について検討した抗核抗体, LE 細胞, LE テスト, RA テスト, サイロイドテスト, 赤沈などとの比較においてはいずれの成績も SLE に対する検出率と特異性を併せると本キットの成績におよばず、しかも本法の SLE における成績は臨床経過の良い示標でもあった。

以上、抗 DNA キットは安定性、再現性の高い測定法であり、しかも本法の検出成績は SLE に特異性が高く臨床治療の良い示標でもあり今後ルチン検査として広汎な利用に好適であると考えられた。

36. β₂マイクログロブリン測定の有用性について

大城 徳成 森本 義人

水田 亘

(神戸市立中央市民病院・臨床病理)

辰己 学 森 徹

高山 英世

(同・内)

山本 和高

(同・内、島根医大・内)

β₂-Microglobulin (β₂-m) は分子量が小さく腎糸球体を容易に通過し、尿細管において大部分は再吸収され異化される。この蛋白質の機能はまだ不明であるが、現段階における β₂-m の測定の臨床